

【平成23年 7月 広域緊急援助隊交通部隊 男性警察官（47歳）】

瓦礫の街で伝わる心

平成23年 3月11日、東日本大震災。

東北地方の人々にとって忘れられない日。

発生直後から、私は、市内の滅灯信号交差点において、交通整理にあたりました。辺り一面は停電となり、不安を抱えながら、多くの人や車が行き交う殺伐とした交差点での手信号での交通整理は、一步間違えると大きな事故に繋がるため、恐怖を感じながらの勤務でした。行き交う人々は、家族を心配していたのでしょうか、みんな急いでいるようでした。



その後のテレビ報道等で、太平洋沿岸各地域の被災状況を目にして、秋田県内とは比べものにならない悲惨な状況に、何もできない自分に苛立ちを感じていました。

そして、震災から約3ヶ月が過ぎた6月、岩手県釜石市内へ応援派遣となりました。

被災地では、震災当初に比べると、大分、落ち着きを取り戻してはいるものの、私達が生活している秋田県内とは全くの別世界でした。電柱より高い立木に、乗用車がひっかかった状態で放置されているほか、信号機は全て滅灯、住宅街であったであろう場所に家屋は一切ありません。漁船が陸地に打ち上げられ、辺りには海水と魚が腐食したような異様な臭いがたちこめていました。

私の勤務場所は、瓦礫撤去の大型ダンプが多く行き交う、漁港近くの住宅街と国道の交差する十字路交差点で、粉塵が舞い散り、時にはゴーグルをしないと目を開けることができない状態でした。

被災地での勤務を通して、秋田県出身の被災者など、多くの地域住民の方と出会いがありました。

交通整理をした交差点近くの民家の撤去作業をしていた年配の女性から、「秋田から来てけだが、おれも秋田だ。ありがどな。」と話しかけられ、飲み物を差し入れして頂きました。秋田県南部から嫁いできたと話すその女性は、気丈に「いづまでも落ち込んでられね。頑張るしかね。」と話し、黙々と作業を続けていました。自分の家が流され、多くのものを失い、さらに避難場所での慣れない生活で大変だというのに、このパワーは何だろう、強い信念のようなものを感じました。

このほか、深々と頭を下げていく人や聞き取れないが「ありがとう」との口の動きをする人、笑顔で片手をあげるダンプの運転手など様々な人がおり、感謝の気持ちが痛い程、伝わってきました。そうした中、自分ではもっとやれることはないのかと自問自答し、申し訳なく思っていました。

しかし、その時の私にできることは、交通事故がないように円滑な道路交通と安全を守ることでした。今、私は再び被災地への派遣を希望したいと思っています。

壊れた建物等形あるものは修復可能ですが、失った尊い命は二度と戻りません。人々の

心の修復は容易ではなく、普通であれば心が折れて、前に進むことができないでしょう。それでも、懸命に前に進もうとしている多くの被災者に会い、警察官として、あるいは一人の人間としてどうあるべきか、今後どう行動すればよいかなど深く考えさせられた勤務でありました。

釜石警察署では今回の震災により、警察官4名が殉職しました。

帰県時、仮設釜石警察署事務室に置かれた遺影に深く頭を下げ、今後の復興作業への協力、そして今できることに精一杯取り組むことを誓いました。